

小幡道昭『経済原論 基礎と演習』第2篇第3章「蓄積」コメント

コメンテーター：松尾秀雄

原論の中央部分である生産論の第3章については、原論研究者の中にあっても、さまざまな呼び方がされうる理論領域である。例えば、宇野弘蔵の『経済原論』（岩波全書版 1964年）にあっては、生産論は以下の三部構成（トリアーデ）をなす。まず、「資本の生産過程」があつて、次に、「資本の流通過程」、そして、「資本の再生産過程」の三部構成で、さらに、最後の「資本の再生産過程」は、「単純再生産」「拡張再生産」「社会総資本の再生産過程」と三つに分かれる。

山口重克の『経済原論講義』（東京大学出版会、1985年）によれば、生産論は、「第1章 労働・生産過程」「第2章 剰余価値の生産—資本主義的生産の本質」「第3章 資本・賃労働関係の再生産—資本主義的生産の条件」というのが生産論の三部構成とされ、さらに最後の第3章部分は、「機械制大工業—労働者の主体性の包摂」「いわゆる再生産表式—商品市場の社会的編成」「資本の蓄積過程—労働人口制限の相対化」とされる。ここでは、資本主義社会をも含めて、あらゆる社会に共通に社会が維持されるという状態とは何を条件にすれば説明でき、また、商品生産の絡みでなりたつ資本主義的生産の社会では、再生産の維持の条件はどのように表現され、その制約条件とされる労働人口の枯渇というボトルネックを資本主義はどのように解除する蓄積論的機構を有しているのかを総括として考察しよう、という姿勢である。ここで、総括として、という表現を使ったのは、労働価値の量的分析と商品価格の変動基準としての商品価値の量的体系の関係性の中で、いわゆる労働価値説が成立するという厳密な論証の理論領域を成り立たせる大前提に、社会の維持の再生産的条件を設定しているということであり、社会的生産の維持のためには、いかなる均衡条件が必要であるかは、すでに生産論冒頭部分の次に措定されていた事柄である、という論理の枠組みを確認しなければならない、ということに他ならない。

マルクスの場合は、『資本論』の篇別構成で見ると、第一部の「資本の生産過程」の最後の篇の名称が「第7篇 資本の蓄積過程」であり、その直前の第6章は、「労賃」となっている。第二部では、「資本の流通過程」というタイトル

のもと、トリアーデ構成を採用しており、「資本の諸変態とその循環」「資本の回転」「社会的総資本の再生産と流通」となっており、そのまた最後の章の表題が、「蓄積と拡大再生産」となっている。つまり、第一部は、蓄積という理論的概念で総括し、さらに、第二部も、蓄積という理論の枠組みで、再度、総括するという構成を取っているのである。蓄積とは、社会的生産の全体概念で見ると、拡大再生産つまり、経済の成長の考察、個別資本の次元で考察すると、個別資本の規模拡大の考察ということになる。

小幡の『経済原論』においては、この生産論の総括部分としての第3章は、「蓄積」というタイトルのもと、いかに剰余価値を処理すれば、社会的生産編成の均衡条件が成立するかという問題意識を基礎にして、同時に、産業予備軍の枯渇という資本主義的生産の時間的な継続にたいする制約を内的な蓄積機構で処理するのが資本主義社会であるか、という問題を解き明かす三部構成を採用している。

つまり、蓄積論が社会的均衡条件としての表式論ばかりで無く、資本構成の定義としての「死んだ労働」「生きた労働」の問題、蓄積の二様式の理論、すなわち「労働力の吸収と反発」(169 ページ)の問題、そして、均衡条件としての表式論を含む構成となっているが、宇野原論や山口原論の構成では、労働力商品の価値規定は労働価値説証明の大前提であるとされるが、小幡の理論構成では「産業予備軍の枯渇」(174 ページ)の直後の部分に置かれている。

小幡原論の「第3章 蓄積」の構成は以下の通りである。「3.1 資本の蓄積」「3.2 労働市場」「3.3 再生産表式」である。

【論点】

Q-1：表題としての「蓄積論」

ここで、蓄積論こそが生産論の最後の大きな表題としてふさわしいかという論点、剰余価値の処理ないし処分という理論に問題は無いか、という二点に絞って、最初の問題提起を行いたい。

Q-1A：「蓄積論」と労働力の均衡編成

まず、表題は理論の中身を的確に表現しなければならないだろうという、軽い問題である。蓄積は、利潤を資本家的活動の量的・質的拡大に再投資するという資本家の行動様式の一部を表す。工場が拡大する、或いは、流通過程での資本投下が拡大するなど、さまざまな活動領域の規模拡大の問題であろうが、

それはどういうことかと言うと、資本の拡大ではなくて、雇用される労働人口の規模が従前の均衡編成の比率通りに吸収される、という事態を理論的に把握すべきではなかったのか、という疑問である。均衡を維持するということと、拡大するということをもっと理論的にはパラレルに論じる工夫が要求されると思われるのである。従って、均衡しつつ拡大する経済成長の理論問題であるという評者の問題意識から言えば、蓄積論ではなく、社会的編成関係の維持と拡大の理論とするべきだったかも知れない。言い換えれば、社会存続理論と社会拡大理論の解明こそが課題であろうと思われる。

Q-1B. : 剰余概念

剰余という概念について論じたい。剰余を論じることは必要を論じることであり、剰余労働時間や必要労働時間を論じることは、搾取理論と階級理論と密接不可分な理論構成にならざるを得ない。しかし、小幡の原論では、搾取や階級は、労働価値説の直接の証明と同じく、ぼやけた処理をされていると解釈されるが、これは私、評者の誤読であろうか。

もし、階級理論を原論に導入するのであれば、近代的なイギリスモデルの純粋資本主義社会の理念的像が、資本家階級・労働者階級・地主階級の三大階級論もありうる話となる。しかし、市場原理から国家を導くことができないと同じく、市場原理からは社会の階級構成を論理必然的に導くことはできない。剰余価値が搾取された労働を基礎とするという二大階級論を前提にするとしても、歴史的な事件を入れ込まなくては説明不能である。つまり、農奴が囲い込みによって農村から追放される、あるいは、櫻井毅が解明したような農村にありながら賃銀労働者に雇用される、ということを前提にしなければならない。市場の発展は、必ず、賃銀と自己労働との交換を要請する、とまでは言うては良いだろうが、どのような階級が社会のなかに生み出されるかは、歴史の様々な時期と地域の偶然の要素が必要であり、土地を地主がすべて所有する社会という前提条件も設定上は大きな問題が残ろうし、剰余労働時間は必要労働時間を超えた労働者の労働時間部分だとする搾取理論も、再考の余地がありそうである。では、搾取理論をどのように乗り越えた理論構築をするべきか。これは、問題提起をする以上は、試論を示すべきだが、交換の実体を再考しつつ、あらたに考えを提起する準備をしているということで、私自身の課題としたい。交換をする人間を設定できても、資本家階級に属するか、労働者階級に属するかの階級理論は設定できないかもしれないのである。

Q-2：資本の原始蓄積

次の論点に移りたい。それは、原蓄と呼び習わされている資本の原始的蓄積の概念に関する問題である。この、原始的蓄積概念は、通常は、資本主義成立の無産の労働者が誕生する歴史的プロセスを示す概念として使われている。これで、生産手段を所有する階級か、生産手段を所有せざる階級かが決定する。いわば、原論に階級が理論的に導入される、マルクス経済学にとっては、非常に重要な概念である。

小幡原論の、少し褒めすぎた表現を使えば、画期的議論のひとつが原始的蓄積理論の再構築である。まず、通常蓄積の場合の小幡の説明から確認しよう。165 ページで、「価値増殖を目的に投じられた資本の増殖分は、それを生みだした資本とまったく同じ性質をもつ。剰余価値は、社会的再生産に追加投入することができる。剰余価値の資本への転化を資本主義的蓄積という。ただ資本蓄積という場合はこの意味である。原理論の内部に限れば、資本蓄積の源泉は、剰余価値以外にはないからである。／ただし、資本量が増加することをすべて資本蓄積とよぶことがある。これは広義の資本蓄積である。この場合は、その源泉は必ずしも剰余価値に限定されるわけではない。剰余価値以外の源泉による資本蓄積が、資本の原始的蓄積である。」小幡は、マルクスの資本の原始的蓄積が資本主義の発生局面の歴史事実を示す用語法に違和感を感じ取っているのである。未来の労働者が封建社会における土地緊縛からの解放として社会に登場するという事態そのものは、資本規模拡大とは無縁だということである。それはその通りである。しかし、だからといって、原蓄を言葉として、換骨奪胎していいとは限らない。原蓄は原蓄として定着した用語法であって、剰余価値以外からの資本投入があるとすれば、それはどこからか、どのように理論化できるか、と論じてみせなければならないのではなかろうか。評者なりに類推すれば、資本結合には応じるが、資本家的な活動は経営者に委譲するような株主的な存在があれば、資本規模も拡大するであろう、という理論的表現なのかも知れない。小幡は、原蓄が困い込みなどの社会激動の概念ではなく、あらたな生命を吹き込んだ概念として使いたい、という主張なのだろうが、歴史の処理をどうするか、エンジェルといわれるような資本提供をどう見るか、無機能資本家の説明をどうするか、周辺部分を詳細に説明する義務を残しているようにも思えるのである。

Q-4：無限の蓄積衝動について

資本家はなぜ金儲けを無限の蓄積衝動としてエンドレスに継続するか、という問題は、貨幣の物神性があるからだとかの、物神性従属人間の発想からは説明されてきたかも知れない。小幡は、「流通論でいちおう説明した」（166 ページ）と言って、将来の物価変動リスクを説明要因にした。しかし、こんなことでは、金儲けの動機を説明したことにはならない。物価が変動するかなどは眼中になくて、資本家は金儲けに熱中する行動主体なのだからである。小幡は、増殖運動の目的を原論で説明するのは、「ほんとうは難しい」（166 ページ）と認めているのであり、何のために金儲けをするのか、自分の享樂のためではなく、資本の自己増殖のためだとしても、人間行動には原理原則があるはずであり、本当に金儲けを目的の実質にしているのか、という問題を含めて、小幡のいう開口部所属の問題にせず、人間行動を見つめ直す必要があるのかも知れない。

Q-5：労働していない人口の扱い

労働していない人口を理論的にはどう処理するかという論点を巡っては、小幡は、多様な議論を積極的に展開している。これも、研究方向としては、共感するところである。まず、173 ページで、「非生産的労働人口を扶養しているというのは一種のイデオロギー」という表現がある。これは、生産的とは何か、という問題が一つあって、流通労働者を生産的な労働者が扶養しているのか、という問題の設定方法と、家族の中に、単に、いわゆる失業者が抱え込まれているのか、という問題設定方法と、家族の中に、家事労働に従事する家族と、家の外に出て、賃銀を稼ぐ家族と、或いは、世代の区分での老後世代とか、子供世代とかを設定するのか、など、錯綜している定義問題である。さらには、イデオロギーであるというのが、扶養しているのは、妻の家事労働が夫の家事労働を免除された労働者存在を扶養しているのか、扶養するという行為それ自身がイデオロギーなのか、これまた、賃銀を得る労働、賃銀を得ない労働の問題を理論的に提起しているのか、判別できない。

これは、175 ページで、「産業予備軍は単なる寄食者ではなく、生活過程に置いて労働している」場合もあるというのだから、自分の料理を楽しんで作っているのは労働概念か否か、一人生活で家事労働という概念が正確に定義できるか、他人のために家事をしているから家事労働なのか、などといった難しい議論を片付ける必要があるだろう。

Q-6：再生産表式について

表式に関しては、マルクスがあれほどこだわった貨幣素材の磨滅とその素材的補填の議論をどうするのか、流通資材や流通労働者の生活資料や価値補填をどのように考えるのか、C と V の比率を一定と置く場合には、生産力上昇要因を捨象してしまう再生産モデルになりはしないか、労働者だって特殊な技能が要求されるのであれば、資本家だって生産や流通には固有な熟練と経験、技術やノウハウが不可欠であり、そうだとしたら、資本の自由な部門間移動前提は、根本の前提から再考すべきではないのか、という論点を提示しておく。

小幡の理論展開は、これ以外にも刺激的な論点が多く包含されているのはいうまでもない。理論的に数式利用で非常に厳密な所は、その前提とする条件の置き方がはたしてどこまで妥当か、などを検討すべきであろうが、ひとまず、とりあえずの問題提起を終えたい。